
Heartbeat **が聴こえる**

ユエ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Heartbeat が聴こえる

【Nコード】

N9843B

【作者名】

ユエ

【あらすじ】

周囲の変化に馴染めずにいるユウキは、クラスメイトの大林にも戸惑いを抱いていた。ただ時折彼に感じてしまう感覚を、何て呼べばいいか分からずに――？

——孤独には慣れていた 寧ろ望んでいた
誰かを思いやる事なんて煩わしくて

バンブの『K』を聴きながら、通学の電車で揺られる。

そう、誰かを思いやるなんて煩わしい。だって自分のことだけで精一杯だ。思いやるのは余裕のある奴がすること。

隣に佇む、その余裕のある奴——大林 勉を見上げてそう思った。一緒に登下校するようになったのは中二になってすぐだったから、もうすぐ一ヶ月になる。

なんでわざわざ遠回りまでする！ いつもクラスで一人ぼっちなのが可哀相だから？ 委員長だから？ こんなことするのは何の為なんだよ……。

——イライラする。こいつの気持ちの在り処がわからない。

睨むように見ると大林の瞳とかち合った。慌てて視線を外す。

「ユウキ、なに聴いてるの？」

こいつは、いつも頭にアクセントを置いて名前を呼んでくる。ユウキ、と。それは家族や他の誰とも違う。胸の中に木霊する呼び方だった。

「……バンブの『K』」

呟くように言った言葉に、泣きボクロのある少し下がった目元を和らげながら尋ねてくる。

「それって有名なアーティストの曲？」

大林の視線を意識してしまう。だけど頬が火照っていく理由は、車内の人混みとその熱気のせいにした。

「BUMP OF CHICKENの曲だよ。黒猫が主人公の。有名だろ。他にも、天体観測とかカルマとか……」

ポツポツと挙げていく曲名を相槌まじりに聞いている。その穏や

かな態度は、こいつの心の余裕が表れてるんだと思った。

突然ガタン、と車体が大きく揺れた。咄嗟のことでバランスを崩してしまう。ヤバイ、と思ったら強い力に腕を引っ張られてそのまま抱きすくめられた。黒い布地とそれに留まる校章を模った金ボタンが目飛び込んでくる。

「ユウキ、大丈夫？」

とくん――。

まただ。この独特なアクセントで呼ばれると、心が不安定になるのに甘い疼きも感じてしまう。こいつに呼ばれたときだけの感覚。こんな感覚を何て言えばいいんだ。

「……………」

目を閉じて答えないとすると大林が言葉を続ける。

「気をつけないと。『女の子』なんだから」

急に不快な想いが全身を駆け抜けた。思いきり腕を突っ張って大林の身体から離れる。

「あたしを……女扱いするな！」

言い放ったとき、ちょうど学校の最寄り駅に着いて後ろの扉が開いた。あたしは目も合わせずに、そのまま降りる。

早鐘のように鳴る鼓動だけがやけに耳についた。

みんなが変わり始めたと感じたのは中学に入学した頃。それまであたしたちには違いなんてなかった。男子と女子に分けられることはあっても、それは単に性別だけの問題で、みんな同じ『子供』って存在だった。

でも、みんなが男や女になりだしてから、あたしたちの世界は変わった。今まで何でもなかったはずのことを恥ずかしがったり、男子があたしたちを見てニヤニヤしたり。女子は男子の目を意識しだした。一つだった世界は急に二つに分かれてしまい、あたしだけがその変化から取り残されてる。だから女扱いされるのにも慣れない。みんな何でもないことのように変わっていく。あたしだけが、

戸惑ってる。

——どうすれば上手く変わる？

四限目を終えるチャイムが鳴った。大林の声で礼をすると途端に教室が騒がしくなる。購買に急ぐ者や机を寄せてお弁当を広げるグループがある。

あたしが食堂に向かおうと席を立つと、そこに大林が近づいてきた。昼食の度に誘いにくる。断つても勝手に付いてくるから、今では気にしないことにしていた。でも、今日は他に数人の女の子も一緒だ。

「食堂だろ？ 一緒に食べよう」

周りの子は明らかに嫌そうな顔をしている。モてるんだから当たり前か。

大林 勉を一言で表すなら、それは『スマート』だと思う。勉強も運動も遊びも万事要領よくやってしまう。あたしみたいな自分の事もままならない人間には羨ましい限りだ。これで顔もイイのだからモテないはずがない。だから大林と楽しい時間を過ごしたい彼女たちからすれば、あたしが邪魔なんだろう。彼女たちは大林を男として見てるんだから。

「……遠慮しとく。これから図書室に行くし」

食堂の予定を自分の中でキャンセルしてドアに向かう。

なのに、後ろで大林が「僕も図書室に行くから、また今度ね」と女の子たちに言い、あたしの傍に寄ってきた。女の子からのあからさまな不満の声を背に浴びながら教室を出た。

「ついてくるな」

隣を歩く大林に声だけで威嚇する。

「僕も図書室に行きたいだけだよ」

嘘ばかり。泣きボクロのある男は性悪だっていうが本当だ。廊下の突き当たりにある階段のところまで来ると下り階段ではなく屋上への階段を上る。でもそれにも、大林はついてきた。

「おい、図書室に行きたいんだろ。それなら下の階じゃないか」

「ユウキと話をしたいから、ユウキの行くところが僕の行き先」

彼の言葉に感情を乱される。もう構うなと思いながら、その言葉に言い知れぬ想いも抱いてしまう。

——これは、何？

屋上への扉を開けると強い風が頬に触れた。向こうで男子数人が円になってバレーボールをしてる以外は人がいない。

肩に掛かる髪が風になびかないように押さえつつフェンスに寄りかかった。

「話ってなに？」

素っ気ない声を装う。乱された心がまだ少し動揺していたから。

向かいに立つ大林は、風のままに髪をなびかせている。ギリギリ生活指導に注意されない程度の茶髪が日に透けている。本当の優等生は上手に校則も破るみたいだ。

少し考えるような表情をしながら薄い唇が開いた。

「……今朝のつてどんな歌」

今朝の？ 『K』のことか。

「そんなの、どうだっていいだろ」

一体どうしたいんだ。話したいことがあつたんじゃないのか。あたしに何を求めている。大林の気持ちは捉えどころがない。だからイライラさせられる。でも、彼の気持ちの在り処を知りたいとあたしは思っている。今も……ううん、いつだって。

大きな背をあたしに合わせるように屈ませながら、大林が瞳を覗きこんでくる。

「知りたいからじゃダメ？」

目を細め口角を上げて笑う顔は猫みたいだ。その顔に自分自身でも気づけないところまで見透かされてしまうような気になる。

「……ひとりぼっちの黒猫が絵描きに拾われて、幸せに暮らしてたんだ。けど貧しい生活のせいで絵描きが死んじゃって、そいつの最後の手紙を恋人に届けてから黒猫も死んじゃうって歌」

簡単に内容を説明する。その間もずっと視線を注がれる。見えな
い糸に絡まれたように、心が捉われてしまいそう。

「『K』ってタイトルは？」

低い穏やかな声が訊いてくる。心地いい音のはずなのに、あたし
の気持ちは落ち着かない。

「え……絵描きが黒猫にh o l l y n i g h t——聖なる夜つて
名前をつけたんだ。そして、死んだときに恋人がその名前に『K』
を足してh o l l y k n i g h t——聖なる騎士つてつけて埋葬
してあげたからだよ」

どんどん熱くなる頬を風が撫でる。同じ風に煽られ、校庭の木々
が揺れる。そのざわめきは、あたしに同調してる気がした。こんな
訳わかんない自分は嫌だ。でも……自分じゃもう、どうしようも出
来ない。

大林から顔を隠そうと俯いていると、危ない、と向こうのほうか
ら声がした。

振向く暇もないまま、あたしは大林に引き寄せられた。不意の温
もりと彼の匂いに抱かれてしまう。

どくん——。

鼓動が何かを訴えかけた。

大林の腕の中でまどろみに身を任すような心地でいると数人の男
子が近づいて来て、二人の傍に転がったボールを拾う。

「すいません」

その言葉で、自分が大林に抱きしめられたままだと気づいて、恥
ずかしさから顔を上げられなくなる。

いいよ、と大林が軽く答え、男子らはボールを持って元の場所に
戻っていった。

「ユウキ、大丈夫？」

今朝と同じ言葉をかけられた。なのに、反発を覚えない。むしろ
違った想いさえ抱いてしまい、ちよつと困る。陽に照らされた制服
越しにお互いの体温を感じて、あたしの意識の底が揺らいだ。

「……だから、あたしを女扱いするなつて」

腕を突つ張つて離れようとしたけど、何かに髪を引つ張られる。

「痛っ」

見ると学ランの第二ボタンに髪が絡まっていた。

「あ、ごめん。今とるよ」

髪を解く為に、大林の長い指が金ボタンにかかる。金に添えられた桜色の爪が、あたしの瞳にはどこか艶やかなものに映った。そんなことを考えてるなんて悟られたくなくて、

「別に。髪を引きちぎったほうが早い」

そう言つて髪を引つ張ろうとした手を、やんわりと大林が制する。
「ダメだよ」

細い身体つきなのに、あたしを掴んだ腕は力強くて彼が男なんだ
と思い知らされる。

「……はなして」

言葉が上擦つてしまう。口の中が乾いて、身体中に不思議な熱
が広がる。自分の中の何かが変わろうとしていた。

「どうしても早く取りたいなら——」

大林が髪の絡んだ金ボタンを掴んで、そのまま制服から引きちぎる。同時に裏ボタンの外れる鈍い音がした。注がれる日差しに煌く
金ボタンを指に挟んで見せながら、

「ほら、とれた」

そう言つた彼の、やっぱり猫みたいに見える笑顔を見た途端——
どつくん——胸のうちに一際大きい鼓動が鳴り渡った。

その瞬間、どうしようもない力が、あたしの中にある大林への意
味を書き換え、書き加えていく。泣きボクロのある少し下がった目
元も、柔らかかそうな茶髪も、口角を大きく上げる薄い唇も。その全
てが愛すべきものになつていく。分からなかった想いにも名前が
付けられた。初めて知る想いばかりで頭がクラクラする。でも、気
恥ずかしさの中に喜びが潜んでいる。そこには、女としての自分が
いた。

あたしは、大林に『ユウキ』と呼ばれることが嬉しかったんだ。どうしてあんなに彼の気持ちになったのか。なんで、大林の前だと鼓動が高鳴っていたのか。それらが集約する答えは一つしかない。

——大林に、恋をした。

あんなにも惑っていたのに、こんなに呆気なく変化は訪れた。大林を自分と違う存在——男として見てることも、今は何だか自然に思える。

あたしは真直ぐに彼を見据えた。そして笑顔で、

「ありがとう、大林」

そう言った。思えば一ヶ月も一緒に登下校してたのに、ちゃんと名前を呼んだのは初めてだった。

彼は呆けたようにあたしを見つめている。

「今……名前呼んだ？」

「わ、悪いか」

「悪くない！ 全然、悪くない！」

大林が慌てたように手も頭もブンブン振る。そしてあたしを見つめながら、

「……なんか、ユウキって猫みたいだ」

「どこが？ と思ってるよ、」

「最初はツンとしてるのに、懐くと可愛い感じとかが」

また恥ずかしいことを言うてくる。でも今度は、大林も顔がほんのり赤い気がする。可愛いなんて面と向かって言われ、

「お、大林の笑い顔こそ猫っぽいぞ」

大いに狼狽した声を返した。いま多分……いや、絶対に顔が真っ赤だ。

顔の火照りを冷ますように手で顔を扇いでいるあたしに、じゃあさ、と大林が猫みたいな笑顔で優しくこう言った。

「『僕らよく似てる』のかも」

『K』のフリーズと同じことを。偶然だろうけど、それは絵描き

が黒猫に出会った時に言った言葉。二人のはじまりの言葉だった。さすが、何でもスマートにこなす大林らしい、と笑いが込み上げてくる。でも、こんな風に始まるのも悪くない。

黒猫にとつての絵描きみたいに、いつだって大林はあたしに幸せをくれる。だから、いつも傍に居て欲しい。ユウキ、と呼んで欲しい。それだけで聴こえてくる。今も大林の前で高鳴り続けるあたしの鼓動――Heartbeat――が。

（後書き）

こんにちは、ユエです

今回は恋になるまでのお話です。

心の成長は外見の成長と違って視認できない分だけ、わかりづらい
と思います。その為に戸惑いや不安に駆られることも多いんではな
いでしょうか。

よろしければ、ご意見ご感想をお聞かせください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9843b/>

Heartbeat が聴こえる

2010年10月8日15時16分発行